

# 虐待の世代間連鎖

—性別による違いに着目して—

## 研究の背景と目的

- 研究の背景
  - ・子どもの虐待はいまなお、世間の注目を集めている  
例：5歳女児虐待事件(東京都)の報道(河北新報)  
第10回虐待防止・県北シンポジウムの開催(宮城県)
  - ・児童虐待の認知件数は右肩上がり  
←関心の高まりによる調査や親の不安
  - ・なぜ児童への虐待件数は減らないのだろうか  
⇒虐待が生じるメカニズムを探索的に探ることを目的  
(本研究は身体的虐待(=体罰)に着目(暴力という明確な基準))

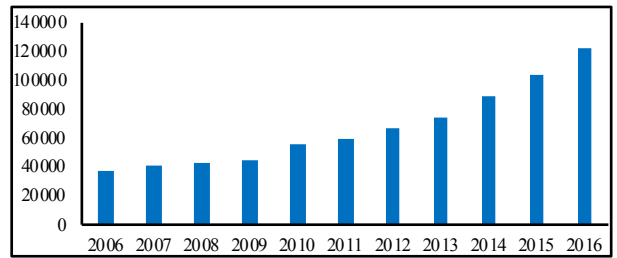


図1：児童虐待の認知件数 (出典：厚生労働省(2017)より作成)

## 先行研究

- 身体的虐待(体罰)に関する先行研究
  - ・多くの親が「殴る・蹴る」は虐待であると認識するも「叩く」などの行為は虐待とみなさない(吉川 2000; 新家ら2004)
  - ・ほとんどの母親(96.6%)はダメージの少ない身体の部位に体罰を伴うしつけを行う(金谷・杉浦 2006)
  - ・子どもの虐待の世代間連鎖は30%程度(Kaufman and Zinger 1993)
  - ・暴力経験が親や教師の体罰を容認しやすく、他には性別、自民党支持などが効果をもつ(岩井 2003, 2010)

## ● 先行研究の限界と本研究の目的

- ・先行研究は示唆に富むものの、男女における暴行経験の受けやすさ(細坂・茅島 2017; Stein et al. 2013)や、世代における体罰への意識の違いを十分に考慮したとはいえない  
→男性の方が虐待を受けやすいにもかかわらず、女性の方が虐待している  
⇒日本において世代間連鎖は本当に成り立っているのか？  
虐待のメカニズムが男女によって異なるのでは？

## データ

- データ
  - ・ JGSS-2008データ  
「第7回生活と意識についての国際比較調査」  
抽出法：層化二段無作為抽出法  
対象：08年8月31日時点で満20歳以上89歳以下の全国の男女調査票：面接と留置B票を使用(以下の変数を使用するため)

## ● 分析方法

- ・ 二項ロジスティック分析
- ・ 岩井(2003, 2010)を参考にモデルや変数を作成
- ・ 男女別に分析を行う  
※分析にはR(3.5.0)を使用

## 変数

- 従属変数
  - ・ 体罰の許容度  
『「親による体罰は、時により必要である」という意見に、あなたは賛成ですか、反対ですか。』  
→「5. 賛成」～「1. 反対」の5段階尺度(反転)  
賛成に分布が偏っていたため、「賛成」「どちらかといえば賛成」を1、「どちらともいえない」「どちらかといえば反対」「反対」を0にするダミー変数に

## ● 独立変数 (詳しい変数の作り方は補足資料に記載)

- ・ 性別
- ・ 年齢(コーホート)
- ・ 教育年数
- ・ 大人から暴力を受けた経験
- ・ 15歳時の世帯収入
- ・ 親の教育年数
- ・ 親のしつけの厳しさ(5.厳しい～1.やさしい)
- ・ 保守政党支持ダミー
- ・ 子どもの教育責任
- ・ 主観的幸福感
- ・ 政治的考え
- ・ 子どもの有無
- ・ 子どもの性別

## 分析結果 男性

	モデル1		モデル2	
	B	S.E.	B	S.E.
切片	2.05 **	0.69	1.49	0.84
1948-67年生まれ (ref 1918-47年生まれ)	-0.32	0.22	-0.35	0.22
1968-88年生まれ (ref 1918-47年生まれ)	-0.46	0.27	-0.38	0.28
教育年数	-0.02	0.04	-0.03	0.04
世帯収入	0.10	0.11	0.09	0.11
大人からの暴力経験	0.68 **	0.22	0.66 **	0.22
15歳時の世帯収入	-0.15	0.10	-0.16	0.10
親の教育年数	0.00	0.03	0.00	0.03
男子ダミー	-0.41 *	0.19	-0.56 **	0.21
親のしつけの厳しさ			0.20	0.14
子どもの教育責任に対する考え			0.06	0.07
主観的幸福感			-0.11	0.10
結婚ダミー			0.56 *	0.26
AIC	823.20		823.31	
BIC	864.85		883.47	

## 分析結果 女性

	モデル1		モデル2	
	B	S.E.	B	S.E.
切片	1.14	0.65	1.24	0.83
1948-67年生まれ (ref 1918-47年生まれ)	-0.39	0.20	-0.46 *	0.21
1968-88年生まれ (ref 1918-47年生まれ)	-0.38	0.23	-0.41	0.23
教育年数	-0.01	0.04	0.01	0.05
世帯収入	-0.06	0.09	-0.04	0.10
大人からの暴力経験	0.22	0.23	0.18	0.23
15歳時の世帯収入	0.02	0.09	0.02	0.09
親の教育年数	-0.02	0.03	-0.02	0.03
男子ダミー	-0.10	0.16	-0.04	0.17
親のしつけの厳しさ			-0.12	0.13
子どもの教育責任に対する考え			0.18 **	0.06
主観的幸福感			-0.17	0.09
結婚ダミー			0.02	0.18
AIC	1051.75		1047.21	
BIC	1093.57		1107.61	

## 結果と考察

- まとめ
  - ・男性では大人からの暴力経験がある人は子どもへの体罰を許容しやすい
  - ・また、男子ダミーが有意な正の効果をもっており、男の子どもがいる人は、いない人よりも体罰を容認しにくい
  - ・女性では大人からの暴力経験は有意な効果をもっていない
  - ・一方、40-60歳のコーホートは有意な負の効果をもっており、61-89歳のコーホートより体罰を許容しにくい
  - ・また、子どもの教育責任も有意な正の効果をもっており、学校よりも家庭に教育責任があると考える人ほど、体罰を許容しやすい

## ● 考察

- ・男性は被暴力経験が高く、その自らが受けてきた教育を学習し、子どもにもそれを適用しようとしている  
→実際に、女性の方が虐待している割合が高いのは、男性が育児に関わる時間が少ないことが影響しているか  
⇒女性は暴力経験を受けておらずとも、育児のストレスなどで虐待を行っている

## ● 今後の課題

- ・子どもに男子が一人でもいる親は体罰を許容しにくい  
⇒このメカニズムは…？